

1 次の文章を読み、後の問い(問1～13)に答えよ。(配点 75)

「人間性」の発揮と歯止め

人間はどうでしょう。一発の爆弾で、一〇万人を超す同じ人間の仲間を、一瞬に殺すことも平気で、^Aあまつさえそこに「大義」なるものを主張することさえ厭われない。生き物にとって最も大切なことである、子孫を残す行為でも、本来の目的には適^あわない、小児から獣までをも欲望の相手にし、そこにも「人間性」を認めるべき、と主張する。ただ楽しみだけのために、狩りや釣りで、他の生き物の数多くの命を、種の絶滅寸前まで殺戮^{ころ}することさえ平気です。本来なら本能が抑制しているはずの欲望の「過剰な」発揮を、人間は「人間性」という「大義」を持ち出すことによって、正当化しているのではないか。そんな見方も成り立ちませんか。

では、人間はそうした「人間性」なるものに、一切歯止めをかけてこなかったか、と言えはそんなことはありません。原始社会においてさえ人間は、人間を超えるものの存在と、その存在が求められると思われる欲望の抑制習慣を作り出してきました。それは社会制度としての宗教に発展し、そこから放恣な欲望の発散を防ぐ^aホウトが、社会のなかに構築されました。宗教は、無神論者にとっては、旧き人間たちが勝手に創出したもので、人間を超える何者かからの神秘的な^bケイジなどを、宗教の根拠にすることは認めないでしょうが、それでも人間社会で、先に述べたような意味で、宗教が果たした、あるいは果たしつつある役割を、頭から否定することはないはずで、つまり、もうこの辺で、この言葉を使ってもよいと思いますが、基本的に「道徳」、あるいは面倒ですからここではほとんど同義とみなした上で、「倫理」は、人類史上、長らく^B宗教に依存してきた過去があります。^(註)モーゼの十戒は、その目覚ましい例の一つでしょう。

西欧近代の罪、あるいは功績の一つは、こうした状況に異を唱えることでした。カントが宗教に対してどのように考えていたか、という問題は、^cヒトスジナワではいかないので、ここでは立ち入りませんが、カントが少なくとも哲学上何とか達成しようとひたすら努力をしたことの一つは、道徳の基盤を宗教から切り離し、それを人間の理性に求めることでした。

カントの試みが真に成功しているかどうか、哲学、倫理学の立場に立てば、厳しい吟味は必要でしょう。しかし、ここは、それをする場ではありません。少なくとも一般的には、現代社会は「**I**」^I「**I**」された社会、言い換えれば宗教に依存しない社会ですから、倫理や道徳の基盤を、宗教に求めず、人間理性に求めることは、決して不自然でも、不当でもないはずで、

甲

というわけで、教養はさておいて、「理性(が生み出す道徳的命命)が邪魔をしなければ」人間はサルにも劣る、という主張の合理性は、こうした議論からも裏付けられると思います。

そして「教養」という概念の少なくとも一部は、ここで言う「^c理性の戒め」を実行するための根源として働くとは私は考えています。「教養ある」ということは、しばしば「知識豊かな」と同義と考えられがちですが、私は、それは事の本質ではないと思います。むしろ、前述の議論を踏まえただうえで、ごく日常的な場面に引き戻して考えれば、「教養がある」ことの意味の一つは、何事にも「**II**」^{II}「**II**」な欲望の発揮を慎む(ことに

よって、理性が命ずる道徳律をも遵守しようとする) ための原動力として教養を考えることは、間違っていないと私は考えます。そしてこの「慎み」は、宗教を起源とする道徳や、理性の厳しい作
用の結果としての倫理とは少し違った、より広い次元での、欲望の抑制装置に付された名前である
ように思われるのです。

「慎み」という日本語に最も相^あ応^あしい英語は〈decency〉だと思います。英英辞典を引いてみま
しょう。ある辞典ではこうあります。

behaviour that is good, moral, and acceptable in society

この用語法から、イギリス語の辞典であることは、想像いただけると思います (余計なことですが、私のワードプロセッサは〈behaviour〉と綴ると、誤表記を表す朱の下線がつきます、まことに大きなお世話です)。もう一つの例を引きます。

the acceptable or expected ways of doing something in society

あえて直訳的な解釈を施せば、前者は、「社会において、良しとされ、道徳的であるとされ、あるいは許容できるとされる行為」となり、後者は「何事かをなすに当たってのやり方として、社会において、許容される、あるいは求められるもの」とでも言えばよいのでしょうか。どちらも「社会において」という限定副詞句がついていることがガンモクでしょう。

順応と「寛容さ」

念のためにデイーセンシーの語源を遡れば、ラテン語の〈deceat〉あるいはその名詞形の〈decentia〉であります。その意味は「適している」「適っている」です。英語に入ったときに、「社会の掟に、規範に、行動原理に、外れていない」という意味を備えたのでしょう。そうだとすると、「掟」には、無論これまで述べてきた、人間の放恣な欲望の制御装置としての道徳、あるいは倫理も当然入るでしょうが、それよりもはるかに広い社会的規範、よく「ノモス」という言葉が使われますが、そうしたものも含まれるでしょう。

したがって、「慎み」も、ある社会で生きていく際に求められる作法、行動習慣に適っていることと解釈することができます。そして、社会がどのような行動習慣を求めているか、を「弁^わえて

いる」こと、それもたしかに知識の一部ですが、それが教養あることの、少なくとも一部を成している、ということが出来るでしょう。「弁^わえて」いなければ、その共同体のなかでは生きられない、つまりアウトサイダーであり、ストレンジヤー (ラテン語で「外部の」を意味する〈extra〉に由来する語です) であり、更にはラテン語の〈alienus〉に発する「エイリアン」(alien = 異星人) できさえることとなります。それはまた「疎外」(alienation [英]) された人でもありましょう。

「人間」という日本語がいみじくも明確にしているように、ヒトは「人々の間」つまり「仲間」のなかで、少し気取って言えば「共同体」のなかで、もつと普通に言えば「社会」のなかで、初めて「人間」になれる、というのは厳然たる事実です。その仲間が積み重ねてきた行動習慣、行動様式

に順応することが、まずは人間としての最低限の義務ということにもなります。^Fその義務を果たすための準備を整えてくれるのが教養でもあります。知識の多いことが、教養があることとは別物だと私が強く主張する所以^{ph}もここにあります。

もちろん人間は、自分の属する共同体の行動習慣に常に従うわけではありません。そこから意図的に離反し、反抗する自由を与えられていると言えます。当然共同体は、それを良しとはしません。イエスは、ユダヤ共同体の内的原理に反して行動したために、死をもつて贖^{あがな}わなければなりません。多くの革命家^Fがそうした運命^{たぐ}を辿っています。しかし、如何なる革命家でも、「人間仲間」としてこれをすべきである、これはすべきではない、これはした方がよい、これはしない方がよい、という区別立て一切を否定するものはいません。いずれ、その人物を中心に新しい共同体が生まれれば（生まれなければその革命は全くの無駄ということになりましょう）、そこにはそうした行動習慣が生まれます。

もう一度確認しておきます。「教養ある」とは、人間が仲間内で静穩^eに生きていくために弁えておくべき行動習慣（私はかつてそれを「規矩^{きく}」という言葉で表現しました）を実践できることです。ただし、^G一つだけ条件があります。これまでの記述では、「教養ある」ことは完全に周囲の共同体からの受動的な状態のようにうけとられるかもしれません。しかし、通常共同体の行動習慣には広い幅があり、相当な許容度・自由度があります。人間は、そのなかで、どの範囲までを自分は守るか、それは自発的に決めなければなりません。完全にそこから離れようとする場合は、前述の「革命家」になりますが、いずれにしても、そこに、人間個人の自由度があり、「能動的」な働きがあります。規矩は、他がどうであろうと、自分はここまです許容度とする、という強い意志によって裏付けられるものであります。と同時に、自分の定めた規矩とは異なつた行動習慣に従っている仲間に対しても、彼らの自由度を認めるだけの「寛容さ」が強く求められます。そうでなければ、人間の社会は、ロボットの社会になってしまいます。教養について、私が何を考えているか、ということの中心的なところは、ここに述べた内容だと、お察し下さい。

2

こうした点からハセイする、教養についての大切な局面の一つを指摘しておきましょう。それはコミュニケーション能力ということです。当然のことながら、カントが考えようとした、人間理性に淵源^{えんげん}する道徳の場合は、基本的に人間（ばかりでなく、理性を備えた存在ならば誰にでも、例えば異星人でも）すべてに普遍・妥当な行動原理であり、行動に関する命令でありました。しかし、「慎み」あるいは「テイーゼンシー」をめぐる議論では、普遍的な原理と全く無関係ではないにせよ、ある特定の社会（共同体）が積み上げてきた行動習慣であり、「掟」が問題になりました。^Iそうしたものは、時間と空間の関数である側面が強く、言い換えれば、時代と社会とによって、大幅に揺れ動く、という性格をもっています。そこに生まれる変動の幅は、歴史、あるいは文化という大きな言葉で表現されるものの関数であると同時に、一つの共同体の内部においてさえ、変動の幅は小さいとは言え、大人と子供、男と女、就いている職業などなどの関数でもあります。そして、自分が属するそうした下位共同体のなかにも、特有の行動習慣があります。そうした他者の行動習

慣を理解すること抜きに、他者とのコミュニケーションは成り立ちません。先ほど「寛容」という概念を持ち出した理由の一つはまさしくそこにあります。ちなみに、先ほどから繰り返し触れているカントは、こうした「他者」の入れ子構造を、法律の立場から、国内法、国際法、人類法、宇宙法とでも呼べるような概念で捉えようとしていました。

話を戻します。自らの規矩はしっかりと定め、守りながら、それ以外の規矩に従って行動する人々を理解するだけの自由度を、自らのなかに持ち続けること、これも「教養ある」ことの一つの局面であります。そして、それが少なくともある程度達成されていない限り、その意味での「他者」とのコミュニケーションも断絶した状態にとどまらざるを得ません。言い換えれば、「教養ある」ことの一つの結果は、どんな他者とも、意思の疎通を（少なくともある程度の充分さをもつて）行うことができる状態、と言ってもよいのでは、と考えています。

(村上陽一郎『エリートと教養』)

(注) モーゼの十戒：「旧約聖書」に記された、神から授けられた十の戒律。モーゼの十戒ともいう。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問 1 傍線部 a ～ f のカタカナは漢字に、漢字はひらがな直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

- | | | |
|---|--------|--------------------------------|
| a | ホウト | <input type="text" value="1"/> |
| b | ケイジ | <input type="text" value="2"/> |
| c | ヒトスジナワ | <input type="text" value="3"/> |
| d | ガンモク | <input type="text" value="4"/> |
| e | 静穩 | <input type="text" value="5"/> |
| f | ハセイ | <input type="text" value="6"/> |

問 2 空欄 I ・ 空欄 II に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つ選べ。空欄 I の解答番号は 7、空欄 II の解答番号は 8。

- ① 人間的 ② 普遍的 ③ 現美化 ④ 情緒的 ⑤ 形式化
⑥ 野放図 ⑦ 内面化 ⑧ 肉体的 ⑨ 世俗化

問 3 傍線部 A 「あまつさえ」の意味に最も近いものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① それぞれ ② それにもかかわらず ③ それだからこそ
④ それだけに ⑤ それなりに ⑥ それ見たことかと
⑦ そのうえに ⑧ そのまま ⑨ その場しのぎで

問 4 傍線部 B 「宗教に依存してきた」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 宗教により無神論者が救済されてきたということ。
② 宗教により放恣な欲望が許されてきたということ。
③ 宗教により欲望の抑圧が防がれてきたということ。
④ 宗教により基盤が築き上げられてきたということ。
⑤ 宗教により理性から切り離されてきたということ。
⑥ 宗教により人間の理性が磨かれてきたということ。

問 5 傍線部 C 「理性の戒め」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 理性により倫理や道徳の基盤を宗教から解放すること。
② 理性が邪魔をしなければ人間はサルにも劣るということ。
③ 人間の持つ理性が放恣な欲望の発散に歯止めをかけること。
④ 人間の理性は倫理や道徳の基盤を宗教に求めるとということ。
⑤ 倫理や道徳の基盤を理性に求めてはならないということ。
⑥ 理性により宗教の基盤を倫理や道徳から解放すること。

問 6 傍線部 D 「『慎み』」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解

答番号は 12。

- ① 人間の放恣な欲望を制御する装置として機能する道徳を守っていくこと。
- ② ある社会で生きていく際に求められる作法、行動習慣に合っていること。
- ③ 英語の〈decency〉に相当する言葉であり、欲望を捨てて生きていくこと。
- ④ 社会の「掟」に外れないよう、一切の自我を捨て社会の規範に従うこと。
- ⑤ 社会が求める行動習慣を尊重しつつ、自らの欲望をすべて抑えていくこと。
- ⑥ 知識を積み重ねていくことにより、自らの欲望を抑制していくこと。

問 7 傍線部 E 「その義務」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は 13。

- ① 教養を身につけていかねばならないという人間としての最低限の義務
- ② 「共同体」の行動習慣を弁えながら知識を積み重ねていかねばならないという義務
- ③ 「社会」が求める行動習慣に合うよう仲間を教育していく必要があるという義務
- ④ 「共同体」の「仲間」として恥ずかしくない作法を身につけねばならないという義務
- ⑤ 「社会」の構成員が積み重ねてきた行動習慣、行動様式に順応せねばならないという義務
- ⑥ 人間の放恣な欲望を制御する道徳を弁えて行動していかねばならないという義務

問 8 傍線部 F 「そうした運命」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 共同体の行動習慣が有する相当な許容度・自由度を逸脱して革命を實踐し、死をもって贖うことにより英雄視されることになったという運命。
- ② 「人間仲間」としてこれをすべきである、これはすべきではない、これはした方がよい、これはしない方がよい、という区別立てをしていかねばならなくなったという運命。
- ③ 所属する共同体から良しとはされなくとも共同体の行動習慣に従わず、放恣な欲望を発散して自らの人生を謳歌^{おうえか}していくことになったという運命。
- ④ 共同体の内的原理に反して行動したために、死をもって贖わなければならなくなり、人々の救い主になったという運命。
- ⑤ 自らが所属する共同体の行動習慣から意図的に離反して行動したがゆえに、自らの命をもつて贖うことになったという運命。
- ⑥ 自分の所属する共同体の行動習慣に反抗して革命を起こし、自らを中心に新しい共同体を生み出していくことになったという運命。

問9 傍線部G「一つだけ条件があります」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決める自由度を持つと同時に、自分の定めた規矩とは異なった行動習慣に従っている仲間に対して、自らの規矩を認めてもらう「寛容さ」を求めてはならないということ。
- ② 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決める自由度を持つと同時に、自分の定めた規矩とは異なった行動習慣に従っている仲間に対して、自らの規矩を認めてもらう「寛容さ」を持たねばならないということ。
- ③ 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決められない一方で、自分の定めた規矩とは異なった行動習慣に従っている仲間に対しては、彼らの自由度を認めるだけの「寛容さ」が求められているということ。
- ④ 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決めねばならないとともに、自らが弁えている行動習慣とは相違する行動習慣に仲間たちが従っているとしても、その者たちを理解するだけの自由度を、自らのなかに持ち続ける必要があるということ。
- ⑤ 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決めねばならないと同時に、人間の社会がロボットの社会になってしまうようなことがないよう、「寛容さ」を他者に求める必要があるということ。
- ⑥ 人間は、共同体の行動習慣のうちどの範囲までを守るかを自発的に決める自由度を持つと同時に、仲間の自由度を認めるだけの「寛容さ」があれば、共同体の行動習慣から完全に離れてしまうようなことがあってもよいということ。

問10 傍線部H「大切な局面の一つ」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① どのような他者とも、少なくともある程度の充分さをもって意思疎通を図れること。
- ② 自らの規矩に従って行動する人たちに対してだけ、寛容であり続けようとする事。
- ③ カントが考えようとした、人間理性に淵源する道徳を普遍的な行動原理とすること。
- ④ 共同体が積み上げてきた行動習慣にとらわれることなく、自由に行動し続けること。
- ⑤ 他者の行動習慣を理解することを抜きにして、他者と意思疎通を行おうとする事。
- ⑥ コミュニケーションを重んじ、他者の規矩を尊重しつつ自らの規矩は放棄すること。

問11 傍線部「そうしたものは、時間と空間の関数である」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **17**。

- ① 共同体の行動習慣は、大人と子供、男と女、就いている職業により変動するということ。
- ② 社会が積み上げてきた行動習慣や「掟」は、時代や社会により変わっていくということ。
- ③ コミュニケーションは、他者の行動習慣を理解することにより成り立つのだということ。
- ④ 時代と社会によつて変動する行動習慣が、コミュニケーションを成立させるとということ。
- ⑤ 時間と空間というものを理解することが、他者との意思の疎通を可能にするということ。
- ⑥ 「寛容さ」を持つということが変化してしまうと、時代や社会も変化するのだということ。

問12 空欄 **甲** ・ **乙** に入る小見出しの組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は **18**。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ① 甲 — 〈decency〉とは | 乙 — 時間と空間の関数 |
| ② 甲 — サルにも劣る人間 | 乙 — コミュニケーション能力 |
| ③ 甲 — 道徳・倫理による欲望抑制 | 乙 — 他者の行動習慣を理解する |
| ④ 甲 — 限定副詞句を持つ慎み | 乙 — 教養についての大切な局面 |
| ⑤ 甲 — 「教養」の本質たる慎み | 乙 — 時代と社会は変動する |
| ⑥ 甲 — 慎みに相応しい英語 | 乙 — コミュニケーションの大切さ |
| ⑦ 甲 — 理性の厳しい作用 | 乙 — 他者の規矩も理解する |
| ⑧ 甲 — 「社会において」 | 乙 — 普遍的な行動原理 |
| ⑨ 甲 — 慎みがあること | 乙 — 他者との意思の疎通 |

問13 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は

19

。

- ① カントが考えようとした、人間理性に淵源する道徳が、基本的に人間すべてに普遍・妥当な行動原理であったのに対して、「慎み」は、普遍的な原理とは全く無関係な、ある特定の社会が積み上げてきた行動習慣であり、「掟」が問題になった。
- ② 他者の行動習慣を理解すること抜きに、他者とのコミュニケーションは成り立たないという「他者」の入れ子構造を、カントは法律の立場から、国内法、国際法、人類法、宇宙法と自ら命名した概念で捉えようとした。
- ③ カントが少なくとも哲学上何とか達成しようとした努力したことの一つは、道徳の基盤から宗教を切り離し、それを人間の理性に求めることであつたが、哲学、倫理学の立場に立てば、その試みが真に成功しているか否かについて、厳しい吟味が必要であろう。
- ④ ラテン語の〈deceat〉あるいは〈decentia〉が英語に入ったときに、英語の〈decency〉が「社会の掟に、規範に、行動原理に外れていない」という意味を備えたのだとすれば、「掟」には道徳・倫理だけでなく、それよりもはるかに広い社会的規範も含まれると考えられる。
- ⑤ 生き物にとって最も大切な、子孫を残す行為について、本来の目的には適わない、小児から獣までをも欲望の相手にし、そこにも「人間性」を認めるべきだと主張する人間は、そうした「人間性」なるものに、一切歯止めをかけてこなかった点ではサルと同様の存在である。
- ⑥ 〈behaviour〉と綴ると、誤表記を表す朱の下線がつくワードプロセッサは、まことに大きなお世話だと言えるが、このことから、世の中に普及しているワードプロセッサというものはイギリス語の辞典を搭載していないということが想像できる。
- ⑦ 「教養ある」という言葉は「知識豊かな」と同義であるとは考えられてこなかったが、「教養ある」とは、人間が仲間内で生きていくために弁えておくべき行動習慣すなわち「規矩」を實踐できることである。
- ⑧ 社会がどのような行動習慣を求めているかを「弁えて」いないということは、その共同体のなかでは生きられない、つまりアウトサイダーであり、ストレンジャーであり、更には「エイリアン」でさえあることを意味し、もはや死をもって贖うしかないということになる。
- ⑨ イエスは、ユダヤ共同体の内的原理に反して行動したために、死をもって贖わなければならなくなったが、多くの革命家もそうした運命を辿つたため、自らを中心に新しい共同体を創り出すということがないまま、多くの革命は全くの無駄ということになってしまった。

二

次の文章を読み、後の問い（問1～14）に答えよ。（配点 75）

アテネ復興の名君

ハドリアヌスは紀元一二四年に皇帝として初めてギリシアを訪問し、各地で恩恵を施した。そして、一二〇年代末と一二三〇年代初めには、とくにアテネを再訪している。この地で皇帝は祭典に参加したり、図書館などの公共建築物をアテネの町に寄贈したりした。今日アテネを訪れると、有名なパルテノン神殿のあるアクロポリスと並んでゼウス・オリュンピオス神殿の柱が容易に旅する者の目に入るが、この神殿は、ギリシア文化華やかかなりし頃に着工されて以来六〇〇年以上もの間未完成のままだったもので、それを一二〇年代末にハドリアヌスが完成させ、落成式を挙行したのである。現在残る柱を見ただけでも当時の **I** を想像するのは難しくないほど、実に壮大な神殿であった。

ギリシア文化の中心地であったアテネは、ローマの支配下に入ってから **A** はかつての繁栄を取り戻すことができずにいたが、ハドリアヌスはその栄華を再現しようとしたかにみえるほど多大な援助を行った。そのため、彼はアテネの人々から神として **崇め** られた。あちこちに彼の像が建てられ、第一回のアテネ訪問の時に彼が到着した月、**B** ボエドロミオンの月が、アテネの暦の一年の初めと **な** ったほどである。アテネの新旧の両市域 **a** をカクするところに立つ門（いわゆるハドリアヌスの門）には、その内側に「ここはアテネ、テセウス（伝説の英雄）の造れる町」と刻されているが、外側には「ここはハドリアヌスの造れるアテネの町。テセウスの造れるものにはあらず」と刻まれているのである。

甲

紀元一一七年に即位したハドリアヌスは、一二二年頃最初の大旅行に出発した。まず現在のフランスにあたるガリアに行き、そこからゲルマニア、すなわちドイツの方に進んで、その地方を守る軍隊の規律を改善した。ハドリアヌスは兵士とともに **II**、簡素な生活をともにして自ら **b** モハンを示した、と古代末期に書かれた彼の伝記には記録されている。一二三年には現在のオランダのあたりからブリテン島に渡り、長城の建設を指示している。ガリアに戻って、南フランスのニームの町で、先帝トラヤヌスの **後** で少し前に死亡したプロティナのために神殿を建てた後、スペインに向かった。スペインのタラコ（現在のタラゴナ）では、散歩していた時に、滞在していた屋敷の正気を失った奴隷に危うく殺されかけたが、この男を取り押さえてかつ処罰せず、治療のために医者 **c** に引き渡したという **美談** を残している。

一二三年末に船でスペインから東方へ向かい、シリアを経て今日のトルコの各地、さらにはルーマニアなどのドナウ川沿岸各地を訪れ、一二四年にはギリシアに入った。ギリシア各地に恩恵を施し、海路シシリーへ渡った。この島では、有名な火山エトナ山に登って日の出を見たという。一二五年には首都ローマに戻ったようであるが、四年半に及ぶ大旅行であった。

ところが、一二七年に即位一〇周年の記念祭を祝うとまもなく、ハドリアヌスは再び大旅行に出かける。一二八年の訪問地は北アフリカであった。首都に一度戻るが、数週間後にはアテネに行き、そこで先に述べたゼウス・オリュンピオス神殿の奉獻を行っている。一二九年には現在のトルコに

渡り、さらに一三〇年にはエジプトに至るが、ナイル川で最愛の美少年アンティノウスを失うという悲劇に出会うこととなった。悲嘆にくれるハドリアヌスは一二一年にシリアを経てアテネを再訪。一三三年にはパレスチナを訪ねて、首都に戻ったのは一三四年の早春であった。

このように、ハドリアヌスはローマ人の住む世界、彼が統治にセキニンを持つ世界を歩き続けた。古代末期に成立した皇帝伝記集『ローマ皇帝群像』^{ヒストリア・アウグスタ}に含まれる「ハドリアヌス伝」には、「それまでのいかなる皇帝も、ハドリアヌスほどに多くの領土を、かつ迅速に旅した者はいなかったといえよう」と記されている。まさに休むことを知らぬ皇帝であった。

詩人の皮肉

こうして「世界」各地を巡幸した皇帝ハドリアヌスは、才知にあふれた人物でもあった。「ハドリアヌス伝」の一六章に、次のような記事が残されている。ある時、詩人のフロルスという者がハドリアヌスのところに詩を書いて送ってきた。

皇帝なんぞにはなりたくない。
ブリトン人の間をうろついて、
…の間に潜んで、
スキユティア人たちの地の冬を
辛抱せねばならぬから。

一部原典に欠損部分があるが、ハドリアヌスが今日のイギリスやローマ帝国東部の辺境地帯をシ
ツ旅行したことを、詩人フロルスが見事に皮肉っていることは容易にわかる。ところが、これに
対してハドリアヌスは次のごとき返事を送ったと伝えられている。

フロルスなんぞにはなりたくない。
安料理屋の間をうろついて、
居酒屋に潜んで、
まるまる太った蚊の餌食になるのを
辛抱しなければならぬから。

見事を返球というほかはない。このような詩のやりとりがジツサイになされたかどうかは怪しい
が、古代においてハドリアヌスという皇帝が、こうしたユーモアのセンスのある、機知に富んだ人
物であったと思われていたことはまちがいないであろう。

「人類が最も幸福であった時代」

ハドリアヌスが統治をした時代のローマ帝国は、今日のヨーロッパ諸国のほとんどを領土にして
いたばかりでなく、アフリカ大陸北岸、中近東地方、黒海の周辺まで支配下に入れていた。北の国
境線は今日のイギリスの北部にあり、南では領土はエジプト南部、西ではモロッコまで広がり、東

部の国境線はハドリアヌス治世初期に幾分後退したものの、それでもシリア地方を前線基地としてチグリス・ユーフラテス両河上流地方で東のバルテア王国に対して優勢を保っていた。そして、この広大な領土を、国境線に沿って配備されたローマ軍兵士と防壁が守っていたのである。

広大な領土の内部は、皇帝の指導する中央集権的な政府が統治していた。帝国内はラテン語が公用語とされていたが、帝国の東半分ではギリシア語が半ば公用語として通用しており、皇帝の官房にはラテン語とギリシア語で公文書を書く書記局が置かれていて、首都からの指示は遠い領地（属州）の片田舎にまで届いた。ローマ人の法律と貨幣、度量衡が、地中海を内海とするこの広大な世界に行き渡り、地中海そのものも海賊の脅威もなく平和のうちに交易が行われた。交易のルートは、この時代地中海世界を越えて紅海からインド洋にも及んだ。東南アジアからローマ貨幣が出土しているのは、まさにその証拠である。

ハドリアヌスが統治した紀元二世紀の前半は、国境地帯では外部の勢力との戦いがあつたもののローマ側がきわめて不利な状態になつたことはなく、また内政上も安定していて帝国を二分するような内乱もなかつた。政治的には静穏な時代であり、経済活動も盛んで、^Gこれまで歴史家たちがこの時期をローマ帝国の最盛期とみなしてきたことも無理はない。一八世紀イギリスの有名な歴史家エドワード・ギボンは、かの『ローマ帝国衰亡史』の中で、この時代を「人類が最も幸福であつた時代」とまで評している。

歴史家ギボンの理想

エドワード・ギボンのこの時代についての評価を端的に表している部分を、中野好夫氏の訳で次に引用しておこう。

一世紀近くにも及ぶ幸福な時期にあつて、その統治は、ネルウア、トラヤヌス、ハドリアヌス、そして両アントニヌス諸帝とつづく傑^まれた君徳と能力とによつて導かれてきた。

かりにもし世界史にあつて、もつとも人類が幸福であり、また繁栄した時期とはいつか、という選定を求められるならば、おそらくなんの躊躇^{ちゆうちゆう}もなく、ドミテアヌス帝の死からコンモドゥス帝の即位までに至るこの一時期を挙げるのではなからうか。

ギボンの最初の文章に出てくる両アントニヌスとは、ハドリアヌスの後継者となつたアントニヌス・ピウス帝と、さらにその後継者であるマルクス・アウレリウス・アントニヌス帝を指している。ハドリアヌスを含むこれら五人の皇帝たちは、今日日本ではローマの五賢帝と呼ばれ、英明・公正・寛大な理想的統治者と理解されている。一方、後の引用文に出てくるドミテアヌスはネルウアの前の皇帝で、「暴君」のレッテルを貼られた人物である。紀元九六年、このドミテアヌスが暗殺されネルウアが即位して五賢帝時代が始まつたのである。また、コンモドゥスはマルクス・アウレリウス帝の息子で、マルクス帝が一八〇年に世を去つてこのコンモドゥスが即位することにより、五賢帝時代は終わりを告げる。歴史家ギボンは、この「不肖の息子」コンモドゥスが暴政を行つたことからローマの衰退が始まつたことをとくに強調している。

このように君主の白黒がはつきりした単^H純な解釈は、ギボン以前から存在していたが、ギボンに

よって啓蒙的な意味を与えられ、英明な君徳ある皇帝たちが統治した理想の時代としての五賢帝時代という歴史像はいつそう定着した。そして、一九世紀以降の近代的な歴史学研究が発展してからも揺らぐことはなかった。

乙

ところで、これまでの話に登場してきた五賢帝第三番目のハドリアヌス、この才知に富んだ賢帝は、実は驚くべきことに、古代においてはたいへん評判が悪かった。在位中から周囲の人々に非常に恐れられ憎まれていた。

人々の憎しみは、彼の死とともに表面化した。紀元一二八八年にハドリアヌスが死亡し、後継者のアントニヌス帝が先例にならって彼を国家神の列に加えるため神格化しようとした時、これを審議する元老院の会議で強い反対が出た。もし、神格化されなければ、かの有名なネロ帝や先にふれたドミティアヌス帝と同様にハドリアヌスは「暴君」のレッテルを貼られてしまうことになる。彼は「国家の敵」とされ「記憶の抹消」がなされて、統治に関する行為はすべて無効とされてしまうのである。

そこで、アントニヌスは涙を流しながら次のように演説したと、ローマ時代の歴史家ディオは伝えている。

わかりました。では、もし彼が下劣で諸君に敵対する者で、「国家の敵」とされるのであれば、わたくしは元首（皇帝）の位に就くのをやめることにしよう。なぜならば、諸君が彼を「国家の敵」とすることで彼の行為すべてが無効となるのであり、その無効となる行為の中にわたくしの養子縁組も含まれているのであるから。

この演説を聞いた人々は、新皇帝アントニヌスに対する敬意と皇帝を支持する兵士たちに対する恐怖から、ハドリアヌスを神格化することに渋々同意した、とディオは記している。こうして、ハドリアヌスは「暴君」と断罪されることから逃れることができたのであったが、この後も古代の文献に見られるハドリアヌス評価は芳しくない。今日「賢帝」の美名をほしきままにしている彼は、当時なぜかくも憎まれたのであろうか。

ここで読者に気づいていただきたいのは、次のことである。すなわち、英明で君徳ある皇帝たちが続けて現れ、ローマが平和と安定の中で繁栄を享受した紀元二世紀、こうした輝きに満ちた時代という歴史像にはそぐわない、賢帝が実は憎悪されていたというようなこの時代の陰の部分の存在である。そして、この時代の輝く部分ではなく、むしろこの陰の部分にこそ、この時代がローマ帝国の最盛期であった理由を解き明かしてくれるヒミツが隠されているのではないかと私は考えている。

（南川高志『ローマ五賢帝』）

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。解答は、解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

- a カク
- b モハン
- c セキニン
- d シサツ
- e ジツサイ
- f 芳
- g ヒミツ

問 2 空欄 ・ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は ・ 。

- | | | | | |
|----|-------------------------|---------|--------------------------|----|
| I | ① 俤才 | ② 俤容 | ③ 許容 | |
| | ④ 許諾 | ⑤ 快諾 | ⑥ 快晴 | 27 |
| | ⑦ 晴天 | ⑧ 天才 | | |
| II | ① 胡坐 ^{かぐら} をかき | ② 引導を渡し | ③ 薄氷 ^{うすこ} をふみ | |
| | ④ みそを付け | ⑤ 辛酸をなめ | ⑥ 檜玉 ^{ひなたま} にあけ | 28 |
| | ⑦ 路頭に迷い | ⑧ さじを投げ | | |

問 3 傍線部 A 「かつての繁栄」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 29。

- ① アテネには、ハドリアヌスの手になる壮大な公共建築物群が立ち並んでいたということ。
- ② パルテノン神殿では毎年のように祭典が行われ、歴代皇帝が参加していたということ。
- ③ ギリシア文化がはなばなしく栄え、その中心となる重要な場所であったということ。
- ④ アテネを訪れると、旅人はすぐにアクロポリスを見ることができたということ。
- ⑤ ギリシア人によつて、ゼウス・オリュンピオス神殿が完成されたということ。
- ⑥ アテネには、ハドリアヌスを神として崇める人々が住んでいたということ。

問 4 傍線部 B 「ボエドロミオンの月が、アテネの暦の一年の初めとなった」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 30。

- ① パルテノン神殿のあるアクロポリスの隣にゼウス・オリュンピオス神殿の建設工事を始めたハドリアヌスを崇敬したアテネの人々は、ハドリアヌスの功績をたたえるために、第一回アテネ訪問の時にハドリアヌスが到着した月を暦の最初にしたということ。
- ② アテネで開催される祭典への参加や図書館などの寄贈をしてくれたハドリアヌスを高く評価したアテネの人々は、アテネの町は伝説の英雄であるテセウスが造つたものではなくハドリアヌスが造つただと信じるようになったということ。
- ③ 皇帝としてギリシア各地で恩恵を施したハドリアヌスの訪問を心待ちにしていたアテネの人々は、ハドリアヌスの到着を待ちこがれてとうとう彼がアテネに到着する月をボエドロミオンの月と名付けてしまったということ。
- ④ ハドリアヌスが初めてアテネの新旧両市域を訪れた時、頭上にはボエドロミオンの月が輝いていたことから、アテネの人々はハドリアヌスを神として崇拜するようになり、アテネの町もハドリアヌスが造つたと考えるようになったということ。
- ⑤ かつての栄華を再現するために何度もアテネを訪れて多くの恵みをもたらしてくれたハドリアヌスを神格化したアテネの人々は、ハドリアヌスのギリシア語読みであるボエドロミオンを自分たちの暦の一月の名称とすることにより感謝の気持ちを表現したということ。
- ⑥ かつての繁栄を取り戻したかのようなアテネの再興に貢献してくれたハドリアヌスをアテネの人々が崇敬し、ハドリアヌスが初めてアテネを訪問した時に到着した月をアテネの暦の一年の始まりにしたということ。

問 5 傍線部 C 「美談」の内容として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① ガリアからゲルマニアを経てドイツ、スペインと旅していたハドリアヌスは、旅の途中で危うく殺されかけたが、その犯人を処罰しなかっただけでなく治療まで施したということ。
- ② タラコで散歩していたハドリアヌスは、滞在していた屋敷の正気を失った奴隷に危うく殺されかけたが、犯人を取り押さえることなく、治療まで受けさせてやったということ。
- ③ ハドリアヌスはスペイン滞在中に危うく殺されかけたが、その犯人を取り押さえても処罰もせず、むしろ医者の治療を受けさせたことが彼の伝記にも記録されているということ。
- ④ タラコで散歩中に滞在先の奴隷に危うく殺されかけたハドリアヌスは、この奴隷が正気を失っていることを知ると処罰をせず、けがをした奴隷のために医者を派遣したということ。
- ⑤ ハドリアヌスは即位後最初の大旅行の途中、滞在先の屋敷で正気を失って殺されかけたが、犯人を取り押さえても処罰せず、治療のために犯人を医者のもとへ連れて行ったということ。
- ⑥ ハドリアヌスは、ガリアから始まった大旅行の途中に殺されかけたことがあったにもかかわらず、その犯人を処罰しなかったばかりか犯人に治療まで受けさせたということ。

問 6 傍線部 D 「休むことを知らぬ皇帝」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 32。

- ① 馬にまたがって領土をくまなくめぐる皇帝の一生は、日々が旅であり、旅そのものを住まいとして旅の途中で亡くなったということ。
- ② 非常にまじめな性格であったハドリアヌスは、皇帝は民のためにすべてを捧げるべきだと信じており、皇帝にも休息日はあるということを知らなかったということ。
- ③ 現在の西ヨーロッパから、東方のトルコ、シリア、パレスチナ、さらにはアフリカ大陸へまで、生涯を大遠征に費やしてローマ人の住む世界を拡大し続けたということ。
- ④ 皇帝即位後しばらくたった紀元二二二年頃からの十数年間、ほとんど首都に戻ることがないほど、領土内のあちこちをまわり、直接現地に赴いて統治を行ったということ。
- ⑤ ローマの国境地帯では外部の勢力との戦いが続いたため、広大な領土を治めるうえで、皇帝は心身を休めることができなかつたということ。
- ⑥ めずらしい文化に触れることや立派な建築物を作ることを好んだハドリアヌスは、休むまもなく、領土中の各地に足をのばして、くまなく見物してまわっていたということ。

問 7 傍線部 E 「機知に富んだ人物であつたと思われていた」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 皇帝のふるまいを面白おかしくよんだ詩を送ってきた詩人に対し、彼の詩を踏襲しつつ詩人のことをからかった詩を作つて返したから。
- ② 皇帝の生活を痛烈に批判する詩を作つて送ってきた詩人に対し、彼の詩がユーモアのセンスを持っていることを的確に評価したから。
- ③ 皇帝の政治に否定的な意見を持つ詩人に対し、その詩人の私生活を批判して地位を貶めることによつて、自身への反対の声を抑えたから。
- ④ 皇帝の日常を皮肉めいて活写した詩を作つた詩人に対し、自身も負けじと詩を作つて返し、自分の方が詩の才能を持っていることを多くの人々に認めさせたから。
- ⑤ 皇帝の行いを遠回しに非難した詩を送ってきた詩人に対し、彼の詩をうまくなぞりつつ、詩人のことをからかった詩を自分もよんで返したという逸話が残されるほどだから。
- ⑥ 皇帝の行動を面白がる詩人に対し、詩人の行動も同じくらい滑稽であるということ自身も詩を作つて示して見せたから。

問 8 傍線部 F 「その証拠」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① ローマ人の関わる交易が地中海世界にとどまらず、遠くインド洋にまで広がっていた証拠
- ② ローマ人の法律と貨幣、度量衡が地中海世界に広く行き渡っていた証拠
- ③ 地中海では海賊の脅威もなく平和のうちに交易が行われていた証拠
- ④ ローマの領土が広がったことで地中海が内海化していた証拠
- ⑤ 広大な領土を皇帝の中央集権的な政府が統治していた証拠
- ⑥ 東南アジアからローマ貨幣が出土した証拠

問 9 傍線部 G 「これまで歴史家たちがこの時期をローマ帝国の最盛期とみなしてきた」理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① ハドリアヌスがローマを統治した時期だったから。
- ② 対外的にも内政上も安定し、経済活動も盛んな時期だったから。
- ③ 経済活動が盛んで、交易ルートがインド洋まで拡大した時期だったから。
- ④ 国境地帯での戦いでローマ側が不利になつたことがない時期だったから。
- ⑤ 繁栄を謳歌できたことによつて、内乱がひき起こされえない時期だったから。
- ⑥ 「人類が最も幸福であつた時代」であつたとローマ人が自認していた時期だったから。

問10 傍線部H「単純な解釈」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

解答番号は

36

。

- ① ネルウァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス・アントニヌスは、傑れた君徳と能力とを持っていたと決めつける解釈。
- ② 皇帝を英明・公正・寛大な理想的統治者と「暴君」に区別し、前者の統治によって国は繁栄し、後者の暴政によって国は衰退するととらえる解釈。
- ③ 五賢帝と呼ばれる、ハドリアヌスを含む五人の皇帝たちの時代が、世界史にあつて、もつとも人類が幸福であり、繁栄した時期であるという解釈。
- ④ ドミティアヌス帝の死からコンモドゥス帝の即位までの時期をなんの躊躇もなく、ひとくくりにとらえようとする解釈。
- ⑤ 一世紀近くにも及ぶローマの幸福な時期は、ハドリアヌスにはじまる五人の英明で君徳ある皇帝たちの統治によるものであるという解釈。
- ⑥ ドミティアヌスとコンモドゥスにそれぞれ「不肖の息子」や「暴君」というレッテルを貼り、彼らが暴政を行わなければローマは衰退しなかったとみる解釈。

問11 傍線部I「ハドリアヌスは『暴君』と断罪されることから逃れることができた」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

37

。

- ① アントニヌスの涙ながらの演説を聞いた人々が、新皇帝に対する敬意と皇帝を支持する兵士たちに対する恐怖から、ハドリアヌスを神格化することにやむをえず同意したから。
- ② ハドリアヌスに「暴君」のレッテルを貼り、彼の統治行為をすべて無効とすれば、アントニヌスが新皇帝の地位に就くことも叶わないということに人々が納得したから。
- ③ アントニヌスの理路整然とした演説を聞いた人々は、新皇帝に尊敬の念を抱き、アントニヌスを皇帝の地位につけるため、ハドリアヌスの神格化を不承不承受け入れたから。
- ④ 涙ながらに演説するアントニヌスを見た人々が、アントニヌスとハドリアヌスを支持する兵士たちに対して敬意を抱き、ハドリアヌスの神格化を受け入れたから。
- ⑤ ハドリアヌスの神格化が認められないのであれば自分は皇帝の地位に就くことをやめるというアントニヌスの言葉に驚いた人々が、態度を一変させたから。
- ⑥ 涙を流しながらハドリアヌスを神格化してほしいと訴えるアントニヌスの姿が、人々のハドリアヌスに対する憎しみを払拭したから。

問12 空欄 **甲** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **38**。

- ① 皇帝にかかる重圧
- ② プロテイナの神殿
- ③ 「世界」を旅した皇帝
- ④ ハドリアヌスの記念祭
- ⑤ スペインタラコの思い出
- ⑥ ハドリアヌスと『ガリア戦記』
- ⑦ ギボンが残した『ローマ皇帝群像』
- ⑧ ハドリアヌスとポエドロミオンの大旅行

問13 空欄 **乙** に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **39**。

- ① 憎しみの凶面化
- ② アントニヌスへの敬意
- ③ 歴史家ディオの言い伝え
- ④ 憎まれた賢帝ハドリアヌス
- ⑤ 神格化されなかったハドリアヌス
- ⑥ ハドリアヌス、この才知に富んだ賢帝
- ⑦ ローマ帝国に最盛期をもたらした理由
- ⑧ 「暴君」のレッテルを貼られたハドリアヌス

問14 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから一つ選べ。解答番号は

40

。

- ① 紀元一二〇年代末にハドリアヌスが完成させ、落成式を挙行したゼウス・オリュンピオス神殿は、有名なパルテノン神殿と並んで建ち、現在残る柱を見ただけでは当時の姿を想像するのが難しいが、実に壮大な神殿であった。
- ② 皇帝の地位に就いたハドリアヌスは、紀元一二二年にガリア、ゲルマニアなどへの大旅行を皮切りに、東方、北アフリカ、エジプトと、ローマ人の住む世界を歩き続け、一三四年にパレスチナ訪問を終えるまで、一度も首都に戻る事がなかった。
- ③ ハドリアヌスが統治をした時代、ローマ帝国は領土を最大に拡大し、北はイギリスの北部、南はエジプト南部、西はモロッコ、東はパルティア王国まで広がり、国境線には防壁が設置され、ローマ軍兵士とともに、ブリトン人やスキュティア人も国境線を守っていた。
- ④ 広大なローマ帝国の領土の内部は、皇帝の指導する中央集権的な政府が統治していたが、帝国内の西半分ではラテン語が、東半分ではギリシア語が公用語として通用していたため、皇帝の官房にはラテン語とギリシア語で公文書を書く書記局が置かれていた。
- ⑤ マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝が死去した後、実の子であるコンモドウスが即位することによって五賢帝時代の終わりが宣言されたため、コンモドウスは「不肖の息子」と呼ばれるようになった。
- ⑥ ギボンが君主の行いの善悪をはっきりと評価する手法を生み出したことによって、そこに啓蒙的な意味が見出され、傑れた君徳と能力とを持った皇帝たちが統治した時代を五賢帝時代として高く評価しようとする歴史学研究が広まった。
- ⑦ 才知に富んだ賢帝とされたハドリアヌスが、実は古代では評判が悪かったことを古代末期に成立した皇帝伝記集『ローマ皇帝群像』所収の「ハドリアヌス伝」で知ったギボンは、大いに驚いた。
- ⑧ 皇帝ハドリアヌスが、古代においても才知にあふれた人物として評価されていたと思われる一方で、在位中から周囲の人々に非常に恐れられ憎まれてもいたという二面性は、ローマが繁栄を享受した時代の陰の部分ともいえる。
- ⑨ 歴代ローマ皇帝の中で初めてギリシアを訪問したハドリアヌスは、各地で恩恵を施したため、アテネにはあちこちに彼の像が立てられ、いわゆるハドリアヌスの門には、「ここはハドリアヌスの造れるアテネの町」と刻まれているほどである。